

## 書評・紹介

J. T. Fawcett (ed)  
“Migration Intentions and Behavior : Third World Perspectives”  
A Special Issue of *Population and Environment* vol. 8, no. 1 & 2

Spring/Summer 1985/86

人口の移動は、人口学の分野において、個人の意志や選好が大きく関与する分野の1つである。したがって、人口学の1つの目的が、人口学的行動の因果的説明にあるとするならば、人口移動の研究は、個人の心理を取り入れなければならない。そのためには、個人や世帯の移動行動の決定要因を洗いだし、統合的モデルといった鳥瞰図が必要となろう。本書はその指針を提供する一素材となるだろう。

編者James T. Fawcettは、東西センター人口研究所（ハワイ）の心理学専攻の人口研究者である。Ajzen and Fishbeinの「態度」の理論をふまえた上で、個人からみた移動のメカニズムを把握する目的で、理論の構築をめざして7つの論文を収録している。

1つめは、Fawcett自身の論稿で、今までの「移動」研究のレビューを行うと同時に本書のオリエンテーションの役目を果たしている。そこでは、移動元と移動先の地域についての認識と移動の動機づけの重要性を主張している。2つめは、T. D. Fuller, P. Lightfoot, P. Kamnuansilpaの「移動計画と移動行動：タイにおける収斂と拡散」で、移動経験の多少と移動行動の関係を扱い、移動経験が豊富な場合にはかつての移動行動が、乏しい場合には意思が、移動行動の重要な予測子となることを見い出している。3つめはG. F. De jong, B. D. Root, R. W. Gardner, J. T. Fawcett, R. G. Abadの「移動意思と行動：フィリピン農村部における意思決定」で、移動意思ならびに行動とその決定要因、たとえば、家族の圧力、親戚の援助、移動の費用、過去の移動経験等の関係を実証的に示している。4つめはR. W. Gardner, G. F. De Jong, F. Arnold, B. V. Garinoの「最適枠組み：移動意思と行動の垂離の分析」で、意思が行動に移されなかった原因を国際移動と国内移動の場合について論じ、主に、国際移動の場合は法律的障害が、国内移動の場合は仕事の機会か家族の問題が障害となっていたとした。5つめは、D. F. Sly J. M. Wrigleyの「ケニア農村における移動意思決定と移動行動」で、青年層に対するパネル調査において、意思がどの程度実現されたかを吟味し、また、移動意思をもたないで移動した人の移動メカニズムも検討している。6つめはT. M. McDevitt, S. M. Gadallaの「地域効用の格差知覚における夫婦の差異を移動決定モデルにとりいれて」で、夫婦の主観的な地域効用の認識の差異と移動におけるその重要性ならびに意思決定における夫の優位性に関して述べている。7つめは、A. B. Simmonsの「地域効用と移動意思決定に関する近年の研究、国際比較」で、主に先の論文を取り上げ批判的に検討している。

各論文とも、Fawcettがいう地域の「知覚」と移動の「動機づけ」の概念を扱い、A. B. Simmonsがまとめて述べているように、大体の研究においてモデルにおけるその重要性をうたっている。しかし、以上の実証的研究の結果において、移動意思が、必ずしもモデルの中で、中核的な位置を占めたわけではない。それは、心理学的視点からみた移動の研究が、まだ緒についたばかりの研究領域なので、意思の測定に困難が生じているためかも知れないが、意思と行動を同一のものともみず傾向には警鐘を鳴らすものと解釈したほうがよいかも知れない。また、先進国の移動メカニズムは、とりあげられた非先進国の場合とは異なる可能性も考えられるので、今後の研究が待たれる。さらに、どのようなデモグラフィックの事象が契機となり、移動行動に移っていくのかという問題を研究する必要もあると考えられる。

(坂井博通)